

[特別企画]

## 川添修司名誉教授追悼

### 川添先生の画文

#### 「韓クニを行く」の思い出

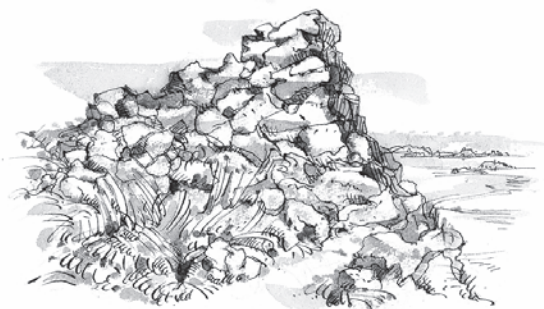
ユ・ヒョジョン

本学名誉教授の川添修司先生が2015年9月24日に亡くなられました。本誌『現代人間学部紀要』の創刊号からご自身の画文で裏表紙を飾ってくださってきた先生は、大学開設翌年の1967年4月に着任され、2007年3月に定年退職されました。在職中はもとより、退職後もご専門の「絵」と優しく温厚なお人柄で大学を支えてくださった先生は、良き時代の和光大学を象徴する方のお一人でもありました。先生の画文やお人柄へのわたし個人の思いをここに記すことで、先生からいただいたご恩に感謝するとともに、在りし日の先生を偲びたいと思います。

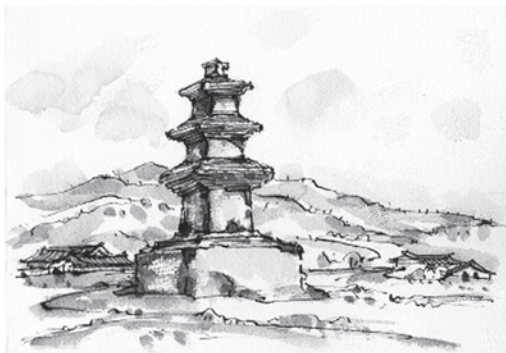
わたしは1990年4月に大学初の外国人専任教員として着任しましたが、先生はその前年度から学生生活部長をつとめられており、毎月の教授会（当時は人文学部）では常に学生側からの要望にできるだけ応えようとする立場をとっていらっしゃるお姿をよく覚えています。

先生とより近くで接する機会として、「アジア研究・交流教員グループ」という学内の研究会がありました。1983年にアジアに思いを寄せる学内の教員有志が学部の垣根を越えて集い、「アジアと日本」「世界の中のアジア」「アジアの諸相」など、「アジア」にかかわるさまざまなモノ・コトに触れ、考えようとして発足したものであり、先生もメンバーとして所属されていました。わたしも着任直後からメンバーに加えていただき、世話人をつとめたりもしましたが、先生からは折に触れて励ましの言葉をいただきました。

残念ながら、わたしは先生のアジアや朝鮮

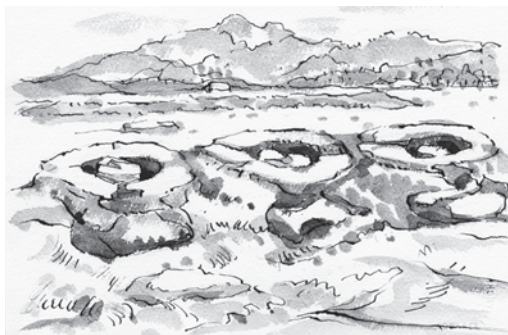


熊川倭城石垣:慶尚南道昌原市(1号・2008年)



南山茸長寺址三層石塔:慶州市(2号・2009年)

への「思い」をそれとして直接ご自身のことばでお話しになった場面に居合わせたことはありませんでしたが、その「思い」が大変深く、熱いものであることは朝鮮関係の総合雑誌『季刊青丘』を通じて存じておりました。この雑誌は、考古学と日朝関係史の専門家であり、長年和光で非常勤講師をされていた李進熙先生を編集長として1989年に創刊されたものです。川添先生は創刊号から終刊号(1996年)となる25号まで「韓クニを行く」というタイトルで「画文」を連載されていました。韓国各地と、高句麗の疆域でもあった中国東北部の寺や山城、村などを優しい筆致で描き、合わせてその情景やご自身の「思い」も書き記したものであり、わたしは深い感銘を受けました。この連載が始まる前の1986年から1996年までの10年間にわたって、先生は韓国・中国各地、そして対馬、九州などを10回以上も訪れているので、おそらく、「韓クニを行く」に連載された絵は、この一連の訪問の際に描かれたものが多いと思われれます。また、旅の大半は李先生とご一緒



皇龍寺址釈迦三尊像台座：慶州市（3号・2010年）

であったものと推測されます。なお、『青丘』の装丁やデザインを担当されていたのは、先生と同じく芸術学科に所属されていた柗光紘先生でした。『青丘』が25号まで刊行できたのも、三人の先生のこうした深い絆によって可能になった面があると思われれますが、お三方の関係は李先生が和光大学の専任教員になられた1994年度以降、一層密なものとなっていたように感じられます。

『青丘』の終刊によって一端途絶えた先生の「韓クニを行く」シリーズは、少し衣替えして、和光大学の出版物にその舞台を移して数年後に復活することになりました。現代人間学部の前身である人間関係学部の人間関係学科の編集によって2002年度から発行された『現代社会関係研究』（『人間関係学部紀要』第1分冊）の裏表紙を先生の画文が飾ることになったのです。2006年度までにこの紀要に掲載された全5点の画文のうち、東大寺の戒壇堂の隅に配された四天王像に踏みつけられている「邪鬼」像を描いた一点を除き、残りはすべて高句麗の遺跡から拾われた瓦を描いたものです。これらの瓦は、歯科医師であった故寺門七郎氏が長い年月をかけて収集され、ご遺族のご好意によって1980年代に本学に寄贈された「寺門古瓦コレクション」の一部をなすものであり、日本古代の瓦が中心をなすコレクションには、海外資料として朝鮮楽浪と高句麗、百濟、新羅の三国時代の瓦が含まれており、貴重な資料として評価されています。

2007年度から刊行されている『現代人間学部紀要』への川添先生の画文の掲載は、直接



河回村仮面劇：慶尚北道安東市河回村（4号・2011年）

的には『現代社会関係研究』に引き続き、柗先生が装丁・デザインを引き受けてくださったことによるものですが、川添先生も画文の掲載を喜んでくださったと聞いております。残念ながら、先生のご逝去により、画文の掲載は本号で終わりとなります。これら二つの紀要は、大学紀要という刊行物につきまとう無味乾燥なイメージとは大きくかけ離れた、潤いを感じさせる上品なイメージの刊行物であるという評価をいただいておりますが、それはひとえに川添、柗両先生のお力添えによるものであり、学部の一員として深く感謝しております。

先生は1995年4月に本学唯一の全学的な研究所として設立された総合文化研究所の年報『東西南北』の題字も書かれていました。また、わたしが所長として刊行した『和光大学総合文化研究所十年誌』の題字も書いてくださいました。研究所は、それまであった学内のさまざまな研究グループを整理・統合しつつ、「既存の学問や学部の枠を超えた問題意識に基づく研究プロジェクトを中心とした課題研究を行い、文化の創造と学術の発展に寄与する」ことなどを目的として、数年にわたる全学的な議論と準備を経て設立されたものでした。また、『十年誌』は、設立から十年間の活動を、その前史にまでさかのぼって振り返りつつ、さらなる発展をはかるうとして企画・編纂されたものでした。

しかし、研究所は設立から21年目となる、そして『十年誌』の刊行からわずか10年を迎える今年度末をもって閉所となり、『東西南北』



樂安邑城民俗村：全羅南道順天市（5号・2012年）



ハフェタル（河回仮面）：安東市河回村（7号・2014年）

も終刊となることが決まりました。あっけないというべきか、それともいさぎよいというべきかわかりませんが、いずれにしても先生のご逝去と同じ年度にこのようなことがらが重なるのは大変つらいものです。先生のあの優しい笑顔が一層偲ばれるこの頃です。

[YU Hyo-Chong・和光大学現代人間学部  
現代社会学科教授]